

正宗白鳥

モウパッサン

——「死の如く強し」——

モウパッサン(三)

——「死の如く強し」——

ナポレオンは、西洋史上の大立物で、何かにつけて引合いに出来る人気者であるが、一生の経路に於てのモウパッサンと彼との奇妙な類似性を指摘する論者もあるのだ。モウパッサンは天才としての奈翁を尊重していた。彼等二人は非凡な頭腦の力と剛健な体力を有していたが、過度な神経の浪費と、放縦な生活のために、脳力を崩潰させることになった。彼等二人は人類に対して烈しい侮蔑觀を抱いていた。そして、ナポレオンは、彼に接

近した人々に対してあらゆる狂暴な態度を示し、モウパッサンは作中のさまざまな男女に対して暴虐の限りを盡たと云っていい。二人とも流星の如くに素早く光輝ある成功を獲たが、運命の女神は、彼等に勝利の生涯の永続を許さなかった。モウパッサンは、千八百八十年から九十一年まで十二年間燦爛たる文筆生活を続けただけであった。ナポレオンの赫々たる生涯も、十二年ぐらいであったらしい。二人とも、末路の悲哀を予期していて、予期通りに悲惨な目に会ったのである。セントヘレナに於ける徐々と泊り来る苦境、衰運の犠牲と、パツシーに於

ける急速激烈な打撃と、どちらが一層みじめであるか、二人とも健康に注意していたのだが、運命は彼等に最も残酷な死を体験させたのだ。一人は胃癌に罹り、一人は発狂した。

それで、モウパッサンの生涯は、十二年という短い範囲に限られていた。彼の青春期には役所の小役人として煩瑣な俗務を勤めていたので、人間であるよりも機械であつたようなもので、彼の人生経路の一部分として取上げる価値はないのである。準備時代であつたとして考えると、無意味でなかつたようだが、しかし、僅か四十一

歳で生涯を終った人間として考えると、三十歳になって、はじめて真の生涯に踏み出したことは甚だ物足りぬ訳である。

自分の作品以外は公衆と関係なしという見解を彼は持っていて、自分の写真の発表をも許さなかった。「汝の生涯を隠せ」という信条を守っていたほどで、「作品を世間に提供しても容貌を提供するのではない」と云っていた。彼の生活方法や製作態度を雑誌記者などに質問されても、いつも返事を拒んでいた。ところが、自己の私生活を世に示したくなかった彼も、フランソワという、

記憶がよくて観察力があって、筆の立った男を従僕にした為に、自分の私生活の表裏が、従僕の日記という形で世に示されるようになったのだから皮肉だ。

それでは、モウパッサンは近代日本の作家のように私小説は書かなかつたかというのと、必しもそうではなかつたらしい。長編「死の如く強し」に於ては、主人公オリヴィエ・ベルタンの名の下に、自分自身を書いていると、西洋の批評家が云っているので、私はそれを信じて、モウパッサンの私小説として読むことに興味を感じた。私は、今度は杉捷夫氏の日本訳によって新たに一読したの

である。私の所有の英訳本には、四十二年四月某夜読終ると、鉛筆で記し、「感慨深きもの」と、お極りの添え書きがしてある。同じ感慨深きものであったにしても、

「女の一生」や「ピエールとジャン」の記憶は薄々残っていたが、「死の如く強し」は、すっかり忘れていて、今度はじめて読むような感じがした。この頃の日本の文壇では、フランス小説の翻訳が盛んに行われているようである。モウパッサンも、短篇は丸山熊男氏によって新たに翻訳されている。長編は杉氏の翻訳が連続して出てくるようである。丸山氏の翻訳振りは甚だ凝ったもので、

技巧を弄していると云っていいくらいである。二葉亭の翻訳みたいだ。英訳のモウパッサンを読むと、叙事も会話も坦々として平明である。これを読みながら、私は、西洋では、翻訳は左程心魂を凝らしてやる仕事ではないのじゃないかと想像している。ギリシヤやラテンなどの翻訳なら兎に角、歐洲の近代小説を隣国語に訳すなんか大した仕事じゃないのだろうと察せられる。

「ピエールとジャン」は、一字一句もゆるがせにしているない整然とした名作であると、翻訳で読んでも感ぜられた。「死の如く強し」は、少しだらしない作品のよう

に感ぜられた。こんなのは西洋の百貨店の書籍部なんか
に、やたらに並んでいる通俗小説の類であろうと推察さ
れた。しかし、作者がモウパッサンであることから、考
え直して見ると、読後に次第に面白くなった。あたり前
の人間の心の剔抉か、奇異な心理の穿鑿か。この通俗型
の恋愛小説について、考慮をめぐらしたくなるのである。

オリヴィエ・ベルタンという独身の画家は、社交界に
知られた才色兼備のギーユロウ伯爵夫人の肖像を描いて
いるうちに、互いに、思い思われるようになって、恋愛
関係を結ぶこととなった。御亭主の伯爵は、疑いの念も

嫉妬心も起さず、至るところで大きな尊敬を払って迎えられる有名な芸術家と自分の妻との親密さを当然のものに思っていた。会っている中に、二人の男は、互いに慣れて来て、遂に愛着を感じ合うようになった、というのだから、甚だお目出たいのであるが、二人は互いに相手に棄てられはしないかと云う事で、煩悶苦悩するのである。伯爵に対しての道徳的苛責なんか何も感じない。「そうだ。断然、この女の情人ではなく、夫になりたい。昔、彼はこの男からこの女を奪い、取り上げてやろうと思つた。完全に盗んでやろうと思つた。今、彼はこの欺かれ

ている夫に嫉妬を感じた。永久にこの女の傍に納り返り、この女のいる家庭という日常の生活の中に、この女との日常の接触の甘やかしの中に浸り切っている夫を」と云うようになるのは無法なようであるが、恋愛に惑溺した男子の心理は、誰れしもこんなものなのだろう。「私もはやあなたなしには過せないということは御存知ではありませんか」と云うような、西洋映画には絶えず出てくる月並の感傷語が、伯爵夫人の手紙の文句に現われるのも、モウパッサンがこんな事を書いていると思うと可笑しい。この小説のうちには、私などが想像し得られる

限りの、恋愛心理の動揺が表現されているが、これは皆作者の体験に基いたのか。孤独の淋しさは、この作者のいろいろな作品のうちに出ているので、その心理表現のうまさは、お家芸見たいで格に嵌っているのだが、この作品は、熱烈な恋愛を主題としたものであるだけに、その孤独感が惻々として読者の胸に迫って来るのである。それにこれは長編である、長年月に渡った日常生活が叙述されているのだから、孤独感もたっぷり出ている。

「水の上」などのような感想録では、世俗から超然とした孤独感が、さも気品風韻があるように現わされている

のだが、この小説では、見すばらしい、憐っぽい、凡人
じみた孤独感が用捨なく現わされている。「家庭へのあ
こがれ、生々とした人の住んでいる家へのあこがれ、皆
で一しよに食べる食事、ずっと前から知り合っている
人々と疲れずに話の出来る毎晩、そういうものを持ちた
いという慾望、接触を求め、肘を突き合わせることを、求
める気持、すべての人間の心の底に眠っていて、独身者
はそれを、戸口から戸口へと、友人達のところへ持って
廻り、そこで多少自分の身を落ちつかせる訳であるが、
そうした水入らずの親しさを求める気持が、彼の愛情に

一種の利己的な力を添えていた」と、孤独の芸術家ベルタンは云っている。愛され甘やかされ、何でも欲しいもののあるこの家の中で、彼は更に自分の孤独をいたわり休ませることが出来ると、弱い音を吐いている。孤独に徹し得られずして他力に依らんとしているのだ。これがモウパッサンの私小説であつて、ベルタンすなわちモウパッサンであろうか。「門を閉じ、俗界から隔離されて、すべての人間を閉め出した邸の静けさの中で、アトリエの気安い平和の中で、眼も心もはつきりした気持で、いやが上にも興奮し、軽快な浮き立つような心で、心爽か

なる中に作品を生み出す、芸術家にのみ与えられるあの幸福を味わった。この仕事の時間中、彼に取ってはもはや、その画筆の愛撫の下に一枚の絵が生れかかっている一片の画布以外は何物も存しなかった」という芸術境地に沈潜することはあっても、長時間の仕事の後で、ふとあたりを見廻しながら、現実には帰る男のはっと目ざめた気持に茫然となる時、自分の手の届くところ、声の届くところには部屋の壁しか見え、部屋の壁しか感ぜられない。家に妻がいないので、そして愛する女とは泥棒のような気のくばり方をした上でなければ逢えないので、

彼は自分の閑な時間を多くの人の出入する方々の場所で過すより外なかつた。

独身芸術家ベルタンは、伯爵夫人の娘アネットの若さに魅せられ、母親たる伯爵夫人の昔そっくりの容貌音声挙動に恍惚として、新たな恋愛境に入るのであつた。母と娘と二人を愛するにいたつたについての二人の葛藤が深刻に表現されていないのは、我々には不思議である。外形的にも心理的にも老男女の間に醜い軋轢がありそうに、日本文壇的小説観からは考えられるのに、モウパッサンはそういう所は興味なげに、書かないで通り過し

た。「ベルタンは二人の傍で呼吸しながら、二人の間に身を裂かれ、不安になり、心を掻き乱され、母親に対しては、恋の情熱が呼びさませられるのを感じ、娘に対してはえたいの知れぬ愛情が湧いて来るのであった」と云うだけで、上篇に結びをつけている。私小説であっても、日本の私小説とはちがって、作家の化身たる男子の立場からだけで書いているのではなくって、女性の立場からも充分に書いている。委曲を盡している。そこが日本の作家よりもモウパッサンのえらいところか。どちらにしても、この小説中の男女は、目下の衣食住については何

等の苦勞を感じないで、色恋の屈託ばかりして日を暮して
てるようなのだから、今日の我々は読みながら別世界の
光景を見せつけられているようなものだ。

孤独感と、老齡の悲哀が、この作品を読んで私の心に
共鳴されるのであるが、四十一歳という壮年期に死んだ
モウパッサンが、何故にそんなに老を悲しむのであろう。
三十代の彼の作品に老年の悲哀が出ているのは可笑しい
ようだが、しかし、私なども三十を過ぎると、早くも心
身の老衰期に入ったように感じたようなこともあった。
四十を過ぎた人間が女狂いでもすると「あの歳で」とさ

げすむことがあつた。永井荷風氏の小説には、三十代にも、すでに老を歎ずるような詞句が散見している。モウパッサンだって、六十七十までも生きていたら、却つてその頃老を讚美するような事を書いたかもしれない。

しかし、詩歌にしても小説にしても、老を悲しむ作品は人の心を打つのである。私が老いているから殊にそう感じるのであろうか。ベルタンは何歳であつたか、作中に明記されていないのだが、まだ左程の年齢と思われな
い頃、伯爵夫人は、或時、彼の頭の上にしなやかな指を動かしながら、「まあ、まっ白よ。最後に残っていた黒

い毛もなくなつてしまつたのね」「仕方がない。よく知つていますよ。実に早い」夫人は相手を悲しませたことが、急に心配になつた。「だつて。あなたははずつと若い時から灰色よ。あなたにお目にかかつてからでも、ずつと胡麻塩ですもの」

モウパッサンは、自分の老や死を、早くから幻想していららしい。作家としての声の凋落をも早くから空想していたらしい。彼の化身たるベルタンは、晩年になつて、或曰「フィガロ」の巻頭論文のうちに、四五人の若い画家を無闇に褒めちぎつて、彼については、「オリヴィエ

・ベルタンの時代後れの芸術」と、事もなげに爪はじきしているのを読んで、胸の真中に拳固の一突きを喰わされたように感じたのであった。それで、恋人の家を訪ねて行って、客間のテーブルの上に「フィガロ」が置かれてあるのを見ると、殆んど反省の暇もなく、独りで手が動いた。その新聞を取り上げたと思うと、閉じ、畳み、泥棒のような素早さで、ポケットの中へ忍ばせた。凋落した老いたる芸術家のやりそうな事であるが、しかし、ナポレオンと並び立つようなモウパッサンが、そんな卑怯な真似をするであろうか。作家としての十二年の間、

成功続きで、彼の作品の一つ一つがパリに於ける社会的
事件であると云っている程であつたので、ベルタンのよ
うな晩年の凋落を感ずる機会はなかつたのだが、彼は空
想裡に、自己の名声の永続しないことを予感していたの
であらうか。ナポレオンと肩を並べ得る彼が、それほど
自信を欠いでいる筈はないのだが、人間の脆弱を見破つ
ている彼は、自分もその脆弱な人間の一員として、凋落
を免れないことを空想裡に浮べていたのであらう。

モウパッサンの描いた婦人のうちには、彼女等の夫や
恋人をさまざまな手管により或は抱擁によつて滅亡させ

る者が多い。昆虫記を書いたファールは、昆虫の行為についてそれと同じ事を観察している。たとえば、雌のカマキリは交接の際に、生きながらの雄を噛んで喰うのである。ファールはそれに多少道徳的解釈を下して、て、読者はそれを喜ぶのである。ところが、モウパッサンは全然道徳化しないで、ただ笑っているのだ。むしろ嘲笑しているのだ。伯爵夫人が夫を欺いていることでも、画家の愛が若い娘に移ったことを、夫人自身も確認したことから起る心理の動揺についても、この小説では、それについて、道徳不道徳というような事を、読者に考え

させる余地を与えていない。作者はそんな考えは、少しも頭に持っていないで筆を運んでいる。カマキリをも人間をも同じような目で見ているところに、我々は妙味を感じていれればいい。恋愛の底知れぬ楽しみよりも、そして、嫉妬の悩み、孤独の悩み、老齡の悩み、そういう悩みばかりが、目立って心に映って来るのは、私自身の読書態度に依るのであるか。

日本文学電子図書館

モウパッサン（三） — 「死の如く強し」 —

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第7巻、新潮社

昭和42年5月30日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館